

Clarendon Press.

元木敏博・里見 穂, 1981: GMS-1 による季節風の短時間連続観測 (第1報), 気象衛星センター技術報告, 第3号, 15-23.

村松照男, 1979: 北陸地方の里雪型大雪時における日本海西部の  $C_b$ ,  $C_u$  ライン, 日本気象学会春季大会講演.

内田英治, 1979: V字型の雲パターンと日本海沿岸の大雪, 天気, 26, 287-296.

Uchida, E., 1980: V-Type Cloud Pattern, and Severe Snowfalls at Coastal Areas of the Japan Sea, Extended Abstracts, Technical Conference on Climate for Asia and the Western Pacific

Area, Guangzhou, 15-20, Dec. 1980, 61-64.

八木正允, 内山徳栄, 内田英治, 黒川信彦, 阿部勝宏, 1979: 冬季日本海でみられた transverse モードの雲列の解析, 日本気象学会春季大会講演.

八木正允, 内山徳栄, 1980: 冬季日本海でみられる大規模なトランバース・モードの雲列についての統計的解析, 日本気象学会春季大会講演.

Yagi, S. and T. Uchiyama, 1980: Analysis of Large-scale Cloud Pattern with Transverse Mode and Consideration on Mechanism of its Formation, Extended Abstracts, Tech. Conf. C.A.W. P.A., Guangzhou 15-20, Dec. 1980, 57-60.



廣田 勇 著

### 大気大循環と気候

東京大学出版会, 昭和56年

8月刊, 4・6判, 124頁,

980円

これは名作である。本の中から著者の大きな声が聞えてくる。本書は「若い人びとへの語りかけ」を編集方針とする「UP アースサイエンス」シリーズの1つで、内容を理解するためには基礎的な物理学と簡単な数学の知識があれば良い(直観力と哲学的思考力が伴っていればいっそう好ましい、というのが著者の希望)。電車の中でも、あるいは夜、寝ころがりながらでも読めるほど読みやすい本である。しかしその内容には深いものがあり(小生の知識が浅いだけかもしれないが?), 「なぜ自然は現在のようにあるのか?」, 「現在あるのが唯一の解なのか?」という必然論が展開され、問題点が指摘される。この論法でまわりの人に議論をしかければ楽しめることうけあいである。思うに著者は大気大循環と気候という題材をかりて「研究の方法序説」を、例をあげ、声を大にして我々に示すことを一番の目的にしているようだ。論旨明快、弁舌さわやかなところがなんとも言えない魅力であり、ときどき出て来る批判も心地好い。

さて本書は8つの章から成る。1. 序論では「水のみ鳥玩具」のエネルギー源が実は地球規模での大気の大循環であると言ひ、思いを全地球に馳せる。2. 放射と熱収支, 3. 大気の運動Ⅰ(理論的考察), と進み 4. 大気の運動Ⅱ(観測的事実)では「平均値の意味」という実に味わい深い議論をする。5. 大気の運動Ⅲ(波動とその作用)。6. 成層圏中間圏の大循環と進み「大気循環の骨格を形作っているものは光と風と波」と言ひてこの章を終る。続く2つの章が気候に関するものである。7. 気候論序説では「気候とは何か」を論じ、気候における平均の意味、特に時間平均のとり方に1つの示唆を与える。8. 気候の変動、ではそもそも「変動」とはいったい何なのかといった素朴でかつきびしい疑問を提起する。そして「研究のおもしろさ」というあとがきの中で「本書に示したような基本的考察に基づいて、一見当り前のことを自分なりにていねいに考え直すことの好きな人、できる人がいたならば、そのような人は将来地球科学を専門に勉強、研究してゆく素質が十分にあるものと期待できる」。と述べて本書を終わっている。

とにかく議論の進めかたが楽しい。索引がしっかりしており、推敲のあとが十二分にうかがわれる。一読をおすすめする。

(大野久雄)